

司馬遷の時代と始皇帝

——秦始皇本紀編纂の歴史的背景——

鶴間 和幸

はじめに

司馬遷（前一四五—前八六年、一説に前一三五年—前八六年）は、『史記』卷六秦始皇本紀に、嬴政が秦王に即位してから対東方六国との戦争に勝利して皇帝に即位したが、わずか十二年にして不意の死を迎え、続く二世皇帝胡亥、子嬰の三代の間に十五年の帝国が崩壊していく歴史を描いた。われわれが中国史上初めての統一帝国秦の歴史を語るときに、もつとも信頼して依拠するのがこの秦始皇本紀である。しかしながらこの史料は、司馬遷が始皇帝の年代記自体として単独に著そうとしたものではなく、あくまでも現代史である今上（武帝）本紀にいたる一連の十二本紀の一端であった。すなわち五帝本紀（卷一）、夏本紀（卷二）、殷本紀（卷三）、周本紀（卷四）、

そして秦本紀（卷五）と秦始皇本紀（卷六）があり、そのあとは項羽本紀（卷七）を介して高祖本紀（卷八）、呂太后本紀（卷九）、孝文本紀（卷十）、孝景本紀（卷十一）と前漢王朝の帝王が続き、卷十二の孝武本紀で十二の本紀は終わる。

司馬遷は卷一三〇太史公自序の最後に、「太史公曰く、『余述べて黄帝以来太初に至るを歴して訖り、百三十篇』』といい、黄帝軒轅から武帝（在位前一四〇―前八七年）の太初年間（前一〇四―前一〇一年）にいたる歴史を記した。太初元（前一〇四）年は、曆を改め、正月を歲首とし、王朝の色を黄色にするなど、前漢王朝が秦の制度からの脱皮を宣言した重要な歳であった。同じ自序に「是に於て卒に陶唐以来、麟止に至るを述べ、黄帝自り始む」ともいい、陶唐と号した堯から、武帝の麟止の記事、すなわち雍で白麟を捕らえ、麟止（麟の趾^ち）を金で鑄した記事で終えたという（索隱服虔注）。『春秋』が哀公十四（前四八二）年の獲麟の記事で終わっているのに、做ったのである。武帝という時代がまだ終わらないうちに、むしろ最盛期にこそその時代を称えるために『太史公書』（のちに『史記』）を執筆した。父の司馬談は、獲麟の記事で『春秋』が終わって以来四百年以上、諸侯が相争って史記（史官の記録）が放棄されてしまったことを遷に遺言として伝えた。司馬遷はのちに上大夫壺遂に対して、明天子（武帝）の盛徳を記録すべきと述べている。

現皇帝の威徳を賞賛するために記述され始めた『太史公書』の編纂も、司馬遷が、匈奴軍に捕虜になつて非難された名将李陵を弁護して、屈辱の宮刑を受けた事件で事態は変わった。孔子、屈原、左丘、孫子、呂不韋、韓非らの賢人、聖人が発憤によつて書を著わしたことにふれながら、かれらは心に鬱積したものを洩らすこともで

きない境遇のなかで、過去のことを述べながら未来に思いを寄せた（「往事を述べて來たる者を思う」という）。

武帝という時代への批判は、こうして現在を直截に述べるのではなく、過去の歴史を語ることによって間接に行われた。武帝の事績の評価は、堯舜や夏殷周三代の王、そして始皇帝を鏡として語られた。司馬遷の筆では、なかでも武帝と始皇帝の二人の帝王の行動様式はきわめて類似している。秦始皇本紀に記述された始皇帝像のなかには、前漢武帝という帝王の影が見える。武帝とほぼ同じ時代を生きた司馬遷が、どのように始皇帝という帝王を描いていったのか、秦始皇本紀の内容をそのまま受け取るのではなく、執筆の歴史的背景をさぐっていこうとするのが本稿のねらいである。

一、秦始皇本紀の史料の性格と構成

『史記』秦始皇本紀の記載形式を整理してみると、全体の骨格になっているのは編年体の形式で秦の事績を論評なしに述べている部分であり、これは魯の史書『春秋』にならった体裁で、中国の典型的な史書の記述方法であった。そしてその記事のあいだに挿入したものが、『戦国策』に見えるような秦王政（始皇帝）と諸思想家との対話などの故事であり、また君主と臣下との間に交わされた公文書の内容であった。そしてさらに内容に生彩をあたえ、史書である『史記』の文学性とまでいわれるのが、かれが地方で収集した史料の部分である。すなわち始皇帝が巡狩のときに各地に建てたみづからを顕彰する刻石の文章であり、地方に残る故事、伝説の類であった。⁽¹⁾

いま秦始皇本紀の史料を、始皇元年（本来は秦王政元年）から三十七年、そして二世皇元年から三年までの計四十年にわたる記事の字数、内容を整理していると、別表のようになる（表一参照）。これによれば、各年の記事の分量は平均していない。始皇九、十、二六、二八、三三、三四、三五、三六、三七、二世元、一、三年の字数が三桁の分量であり、なかでも二六、二八、三五、三七、二世三年は千前後のかなりの字数に達する。この数値はそのまま司馬遷の本紀記事の力の配分を反映しており、興味深い。字数の増加の理由は、故事伝説、刻石文、詔書・上奏文などを編年記事に加えて挿入したからである。これらを除いた本来の編年記事の字数に大きな差はない。

司馬遷がとくにその筆に力点を置いた箇所は、そのまま司馬遷が秦史の理解で強調しようとした年代である。まず始皇九（前二三八）年では、秦王政の母太后の愛幸を受けた嫪毐の反乱の顛末を記述し、翌年の記事では相国呂不韋がこの乱に連坐して失脚し、かれに代わって尉繚、李斯が重用されたことを記し、冠礼を前年に終えた二三歳の秦王政が君主権力の独裁へと向かっていく序曲が描かれている。⁽²⁾ つぎの力点はいよいよ秦王政が東方六国を併合して皇帝号を称し、五行の水徳に従った制度改革、郡県制の採用、度量衡、車軌、文字の統一などの諸事業を詳述した始皇二六（前二二二）年である。そして統一後は、始皇帝が地方を巡狩した始皇二八（前二一九）年、始皇二九（前二一八）年、始皇三三（前二一五）年と、始皇三七（前二一〇）年、死を迎える最後の巡狩の年の記事は、地方の史跡、伝説などをとくに詳しく取り上げている。そして二世皇帝の三年間は、二世皇帝の年代記に借りた秦王朝崩壊の記事であり、そこでは地方から反秦の勢力が押し寄せてくるなかで、中央では無能とさ

表1 秦始皇本紀の記事内容

司馬遷の時代と始皇帝

鶴間

第七十七卷

五

年号	総字数	編年記事	天文・自然	公文書・故事伝説	六国年表字数	対応列伝記事
元(246)	7	○			8	
二(245)	10	○			0	
三(244)	26	○10月			11	蒙恬伝
四(243)	45	○3月10月			16	
五(242)	29	○			12	蒙恬伝
六(241)	43	○			5	
七(240)	41	○5月	彗星		14	呂不韋伝(夏太后死)
八(239)	97	○			6	
九(238)	202	○	彗星(2回)	嫪毐の乱	19	呂不韋伝(嫪毐の乱)
十(237)	293	○		齊人茅焦と秦王の対話 大梁人尉繚と秦王の対話	18	呂不韋伝
十一(236)	48	○			15	王翳伝
十二(235)	84	○			20	
十三(234)	32	○正月10月	彗星		24	
十四(233)	42	○			21	
十五(232)	17	○			11	
十六(231)	27	○9月			9	
十七(230)	32	○	地動・大穢		21	
十八(229)	28	○			0	王翳伝
十九(228)	85	○	大穢		13	呂不韋伝(帝太后死) 王翳伝
二十(227)	48	○			15	刺客伝(荊軻暗殺未遂)
二一(226)	60	○	大雪		4	
二二(225)	22	○			12	魏世家(魏大梁城攻撃)
二三(224)	45	○			13	蒙恬伝
二四(223)	18	○			11	蒙恬伝
二五(222)	43	○5月			19	
二六(221)	930	○		秦王→丞相、御史→秦王丞相、廷尉→始皇	15	蒙恬伝
二七(220)	60	○			26	
二八(219)	1047	○		泰山刻石文(144字)、琅邪刻石文(494字) 齊人徐市の上書(640字) 周鼎伝説 始皇と博士、湘山祠	29	
二九(218)	335	○		博狼沙の盜賊、 之棠(144字)・東觀刻石文(144字)	14	
三十(217)	2	×			0	
三一(216)	56	○12月		蘭池の盜賊	22	
三二(215)	206	○		碭石刻石文(108字)、亡秦図書	8	蒙恬伝(撃胡)
三三(214)	90	○	明星		41	
三四(213)	499	○		僕射周青臣、博士齊人淳于越 丞相李斯、始皇制書	18	李斯伝(焚書) 蒙恬伝(長城)
三五(212)	237	○		盧生と始皇の対話(630字) 侯生、盧生の謀と始皇 長子扶蘇と始皇	9	蒙恬伝(直道)
三六(211)	188	○	彗惑・彗星	隕石伝説 江神の玉伝説	25	
三七(210)	989	○11月7月9月		会稽刻石文(288字) 方士徐市と始皇(157字)	32	李斯伝(巡狩・始皇帝死・沙丘の謀) 蒙恬伝(死)
二世元(209)	678	○4月7月		二世詔(78字)、刻石 趙高と二世皇帝	44	李斯伝・蒙恬伝
二世二(208)	532	○		趙高と二世皇帝 左右丞相、將軍→皇帝	28	李斯伝・蒙恬伝
二世三(207)	1023	○8月		趙高と二世皇帝 涇水のたたり伝説	41	李斯伝・蒙恬伝

れた二世皇帝が自殺に追いやられ、趙高が子嬰を立てて権力を奪いながらもその子嬰にすぐに殺された様子が劇的にまで詳しく語られている。⁽³⁾

性格を異にする史料からなる秦始皇本紀の内容をすべて史実として受け入れて秦帝国形成史を語ったり、また逆に伝説部分だけを一律に除き、残りを客観的な史実として全面的に信頼することにも慎重でなければならぬ。司馬遷は秦側の史料と東方六国側の史料を羅列し、結局は前漢武帝時代の人間として、しかも武帝から屈辱的な処遇を受けた一個の人間として執筆した『史記』のなかで秦史を記述したからである。この複雑な立場で叙述された歴史は、一度司馬遷の秦史として相対化させる必要があるであろう。

そのためにはまず秦始皇本紀の各記事がどのような経過、由来で挿入されるにいたったのかを見きわめておく必要がある。司馬遷はたしかに太史令として、都において史記（史官）の記録や石室、金匱に収められた国家の蔵書にふれ（太史公自序）、なかでも秦史の記述のためには秦国の記録である『秦記』を読んだけれども、内容は月日も記載されずいたって簡単なものであったという（六国年表）。したがってとくに統一後の記述にあたっては新たな史料を必要とした。それが地方に残っていた秦の史跡であり、伝説であり、司馬遷は地方を巡る機会のなかでそれらにふれていった。

二、司馬遷の地方旅行——始皇帝の史跡・伝説との遭遇

すでに述べたように、『史記』秦始皇本紀には伝説、故事が多く引用され、これは『史記』のもつ文学性とし

て強調されがちであるが、むしろ司馬遷の選んだ歴史表現の一形態として理解すべきであろう。司馬遷の史観の中心は王朝交替の必然性、漢王朝の正統性を主張するものであり、それを表現するためには『秦記』という秦王朝の側の簡単な年代記だけでは不十分であった。すでに焚書の対象となり亡逸していたという諸侯の史記を捜す必要があったが、それよりも秦帝国崩壊から一世紀も経ていない東方の人々にはまだ反秦的な感情が伝えられていたので、それらの生の証言に耳を傾け、さらに秦の史跡を見つめることを選んだ。秦帝国が滅び項羽と劉邦の楚漢の戦いを経て、劉邦が前漢帝国を樹立したといっても、武帝の時代までは、秦対東方六国という東西地域の対立の図式は依然と色濃く残っていた。

旧戦国秦の地関中の夏陽県（唐以降の韓城県）に生まれ、父の太史令司馬談について武帝の茂陵邑に居住していた司馬遷にとって、はじめての外遊といふべき旅行は前一二六（武帝元朔三年（前一二五年）生年説では前一年）、二十歳のときであった。『史記』卷一三〇太史公自序には、

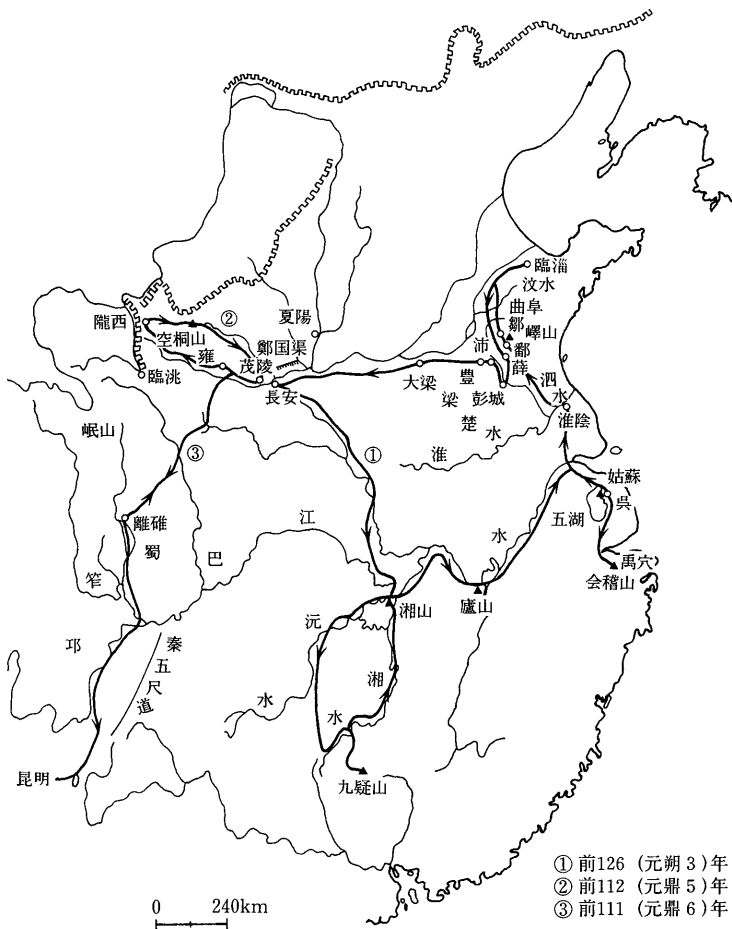
二十にして①南は江、淮に遊び、会稽に上り、禹穴を探り、九疑を闚うかがい、沅、湘に浮かび、②北は汶、泗に涉り、齊、魯の都に講業し、孔子の遺風を觀、鄒、嶧に郷射し、鄙、薛、彭城に厄やこ困し、③梁、楚を過ぎて以て帰る。

と見え、訪問した先が南方①、北方②と、帰路の經由地③に分けて述べられている。ここに挙げられた地名の順序は大きく迂回しているので、そのまま進行経路を表すわけではない。司馬遷は長安を出発して、まず長江に出、舜の終焉地九疑山を経てから沅湘（湖南沅水、湘水）を航行してまた長江に戻り、会稽山で禹王の

陵を探りあててから北上し、汶水、泗水を渡り、斉の臨淄、魯の曲阜を訪れて孔子の遺風にふれ、鄒、嶧で郷射の礼を見てから、鄆、薛、彭城（徐州）に寄り、梁、楚をへて都に戻ったことになる。この旅程は始皇帝の第二回巡狩（前二二九年）、第五回巡狩（前二一〇年）経路とも重なり、司馬遷は始皇帝にゆかりの深い会稽、斉の都臨淄、鄒の嶧の地をこのときに訪れたことになる。旅行の目的がのちに父司馬談に代わって執筆することになる『史記』の資料収集であるかは何も語られていないが、少なくとも訪れた場所は五帝や夏王朝などのゆかりの古跡であり、各地の印象記を『史記』論贊などに残しているのは、このときの体験が結果として『史記』のなかに中華帝国史をまとめるうえで大きな影響を与えていることは間違いない。⁽⁵⁾ また直接その地を訪れたとは明示されていないが、太史公自序のこの記述の経路に当たると思われる地の記事のなかで、当地で得たと思われる史料、故事が挿入されている場合には、司馬遷の地方体験が活かされていると考えてよい。司馬遷がこのときの旅で、秦史料とどのように出会い、入手したか、経路に沿って整理してみよう。

司馬遷は、始皇帝が始皇二八（前二一九）年の巡狩の途上、「江に浮かびて湘山祠に至る」（秦始皇本紀）と記したが、司馬遷自身も同じように、「沅、湘に浮かぶ」（自序）体験をしている。湘山祠とは湘水が注ぐ洞庭湖北岸にある湘山（青草山）の南麓に建てられた廟であり（『史記』正義引『括地志』）、九疑山に埋葬されたという舜の二人の王妃を祭った所であった。現在でも湖南省岳陽市西の洞庭湖に突出した岬にある君山に二妃墓と伝えられるものがある。この君山は洞庭湖の水上に船のような形で迫り出した平たい丘であり、増水期には湖水に浮かぶ島となる。ここは湘水を南下する場合には、水難から航行者を守る役割をもっていたのであろう。司馬遷も九

[地図1：司馬遷の旅行(1) (第1回－3回)]



(参考：大島利一「司馬遷旅行図」，加地伸行「司馬遷旅行図」，小倉芳彦「司馬遷の旅行年代と経路」，引用書は註(5)参照)

疑山への往復に立ち寄ったものと思われる。ここで秦側の史料には残るはずもない一つの反始皇帝伝説を耳にした。始皇帝の巡狩の一行が大風に遭って航行を阻害されたのは、ここに埋葬された舜の妻の湘君の神のためであるからだと博士から説明されると、始皇帝は激怒して刑徒三千人に湘山の樹木を丸裸にしたという（秦始皇本紀）。しかし湘山（青草山、君山）の形状を考えると、これは水辺の雑草しか生えない中州の丘陵だからこそ逆に生まれた伝説であり、高い樹木の生い茂るような山をわざわざ伐採して禿山にしたというものではないであろう。

会稽では始皇帝が前二一〇（始皇三七）年第五回巡狩の際に立てた刻石を実見し、秦始皇本紀に収録した。始皇帝が会稽への途上、浙江（現錢塘江）を渡ったときに、項羽が始皇帝を見て、「彼は取って代わる可し」と漏らし、叔父の項梁があわてて口を塞いだ故事も（巻七項羽本紀）、司馬遷がこの地で耳にした伝説であろうか。

卷四七孔子世家の論贊には、

余孔子の書を読み、其の人と為りを想見し、魯に適く。仲尼の廟堂、車服礼器を觀るに、諸生は時を以て礼を其の家に習う。余祗ここに回留して去る能はずと云り。

とあるように、魯では孔子の死後も諸生たちが学問に勉めており、司馬遷も立ち去りがたかったという。始皇本紀に登場し、封禅のことを議論した魯の諸儒生も（始皇二八年記事）ここで学んでいた人々であった。自序によれば、鄒の嶧山では、郷里で德行ある者を中央に推薦し、送別するために飲酒を伴った郷射の礼が周礼にのっとり行なわれているのを見た。このとき始皇帝が始皇二八（前二一九）年に登ったときに立てた刻石に出会って

いるはずだが、秦始皇本紀にはなぜかその文章は記録されておらず、ただ

二十八年、始皇東のかた那県を行き、鄒嶧山に上る。石を立て、魯の諸儒生と議し、石に刻して秦徳を頌し、封禪、山川を望祭するの事を議さしむ。

と記述するだけである。鄒の地は魯とならんで周公の遺風があり、儒家の礼を重んじた地であった（『史記』巻一二九貨殖列伝）。始皇帝の焚書事件をことさら非難した前漢時代の儒者たちによって、刻石が撤去、破壊された可能性は考えられてもよい。

彭城では、始皇帝の泗水周鼎引き上げ失敗伝説を耳にしたようだ。⁽⁶⁾始皇二八（前二一九）年、始皇帝の巡狩の一行が琅邪台から南下して彭城を過ぎたときに、齋戒して祭祀し、泗水から周の鼎を引き上げようとしたが、千人もの人間を水中に入れても入手できなかった。

自序にはふれていないが、『史記』巻九五樊鄴滕灌列伝には、「太史公曰く、吾、豊、沛に適き、其の遺老に問う」とあるので、この旅行で高祖劉邦の故郷、沛の豊邑に立ち寄ったことがわかる。巻八の高祖本紀には、劉邦が亭長として刑徒を驪山陵の建設工事に護送する途中、豊の西沢で道に迷って刑徒を釈放し亡命した記事が見える。この地に突如現れた老婦が「わが子白帝の子（秦）が蛇に化身し、赤帝の子（漢）に斬殺された」と伝えた。この故事は、漢代になってから劉邦の故郷に伝わっていた反秦故事の一種であろう。同本紀に「秦始皇帝常に曰く、東南に天子の気ありと。是に於て因りて東游し以てこれを厭おそう」と記された故事も、王朝の交替を予言するものであり、秦側の文字史料に記録されるものとは考えがたいので、やはりこの地に伝わっていたものであ

ろう。司馬遷はこのような故事に接することによって、秦始皇帝に代わる新たな皇帝像を高祖本紀に描くことになった。

最後に長安に戻る途中立ち寄った戦国魏の大梁故城の遺跡では、故城内の住人から、

秦の梁を破るや、河溝を引き大梁を灌し、三月にして城壊れ、王降らんことを請い、遂に魏を破る（巻四四

魏世家論贊）。

という魏の最期（前二二五年）の故事をなまなましく聞いている。司馬遷の時代から百年前の秦と魏の戦争故事である。秦史の記述にも秦側にのみ立つのではなく、東方六国の立場を取り入れているのは、まさにこのときの旅行の成果といえよう。

司馬遷の最初の旅行は、その目的が始皇帝の史跡を訪ねるものではなかったけれども、その経路は始皇帝の巡狩とよく似ていたため、必然的に始皇帝の事跡と出会うことになった。それは始皇帝も司馬遷も上古の帝王の史跡を捜し求めたからであり、しかも秦漢時代の主要な交通路を利用したからであった。始皇帝は自らの権威を五帝、三王に比する必要があったし、司馬遷は中華帝国史の記述のために五帝、三王を秦の前史に位置づける必要があった。

三、司馬遷の武帝巡狩随行の旅

第二回目以降の旅行は武帝に官吏（郎中、太史令）として随行したものであり、王国維、鄭鶴声、佐藤武敏氏

等の研究によれば、王氏は五回（二十歳の旅行を含めて全六回）、鄭、佐藤氏は六回（全七回）を数えている。⁽⁷⁾ いま後者の説に従って、司馬遷が旅行のなかで秦や始皇帝の史跡とどのように遭遇したのかを見ていきたい。

武帝は前一四一年に十六歳で即位したが、治世五四年のうち前半の三十年は、北は匈奴への九回にのぼる侵略戦争（前一二九—一九九年）、南は閩越、東甌、南越諸国間の紛争への軍事介入（前一三八、前一三五—前二五五年）、南越攻略（前一二二—一一二年）、西南夷征服（前一一一年）、また黄河の下流瓠子での大洪水（前一三二年）など不安定な情勢が続いた。国内もけっして安泰とはいえず、呉楚七国の乱後もとくに東方の淮南国、衡山国などの諸侯王の勢力とは緊張状態が続き、淮南王劉安の謀反事件も起こった（前一二二年）。東方勢力との緊張を抱えながら匈奴と南越との対外戦争を進めた武帝期の情勢は、一時代前の秦のときの情勢を彷彿とさせる。しかし対外的には漢朝の軍事的優勢、対内的にも中央政府の郡県支配の完成とともに、前漢帝国は一世紀にしてようやく安定期を迎えた。武帝の後半の治世に全国を度々巡狩したのは、その時代の反映といえる。

さて現在の『史記』卷十二孝武本紀は、司馬遷の執筆した「今上（武帝）本紀」ではなく、のちに卷二八の封禪書の文章をそっくり写したものであるために、司馬遷が本紀で武帝という皇帝をどのように描こうとしたかわからない。⁽⁸⁾ ここでは残された記述から、司馬遷が武帝に随行するなかで、一世紀前の帝王始皇帝と秦という時代についてどのように意識していたのかを探ってみたい。ここでは現世の皇帝との比較のなかで始皇帝をとらえていたともいえるし、逆に始皇帝を通して現皇帝を描いていたともいえる。

武帝が初めて地方の郡県を巡行したのは、前一一三（元鼎四）年、后土祠を汾陰に立てるためであった。しか

し郎中司馬遷が確かに武帝に随行したといえるのは、翌前一二二（元鼎五）年であり、このときが第二回目の旅行と見られている。武帝の巡狩の経路は武帝本紀（封禪書と同文）に「上遂に雍に郊し、隴西に至り、西のかた空桐に登り、甘泉に幸す」とあり、ちようど始皇帝の第一回巡狩と同様、西方を巡った。そして五帝本紀に「太史公」西のかた空桐に至る」とあるので、司馬遷もここを訪れたことがわかる。始皇帝の巡狩の経路は、隴西、北地、鶏頭山、回中であり、重なる所が多く、武帝も始皇帝も黄帝ゆかりの地を目指したのである。また秦の時代この地は領土の最西端に位置し、長城の西端臨洮の地でもある。漢代にはこの地に長人伝説があったようだ。前二二一（始皇帝二六）年に身長五丈、足が六尺の大人十二人が夷狄の服を着て臨洮に出現したという（『漢書』五行志）。夷狄も秦の統一に服するという故事は秦代のものとは思われないので、司馬遷はこうした故事を聞いたたり、漢長安城の長樂宮に置かれていた秦の金人（『三輔旧事』）を見て、

（始皇二六年）天下の兵を収めてこれを咸陽に聚め、銷して以て鍾鐻を為り、金人十二、重さ各千石、廷宮中に置く（秦始皇本紀）。

という記述になったのであろう。そして秦の長城の西端は実は戦国秦のものであったけれども、統一秦の長城を万里の壮大なものとし、西は「臨洮より起こり、遼東に至るまで万余里」（卷二〇匈奴列伝）とした。

その後第三回目の旅行は、前一一一（元鼎六）年の武帝の西南夷平定派遣軍に従うかたちで、巴蜀から南の昆明まで赴いた。『史記』太史公自序には先の記述に続けて、

是に於て遷仕えて郎中と為り、奉使して西のかた巴蜀以南を征し、南のかた邛、笮、昆明を略し、還りて命

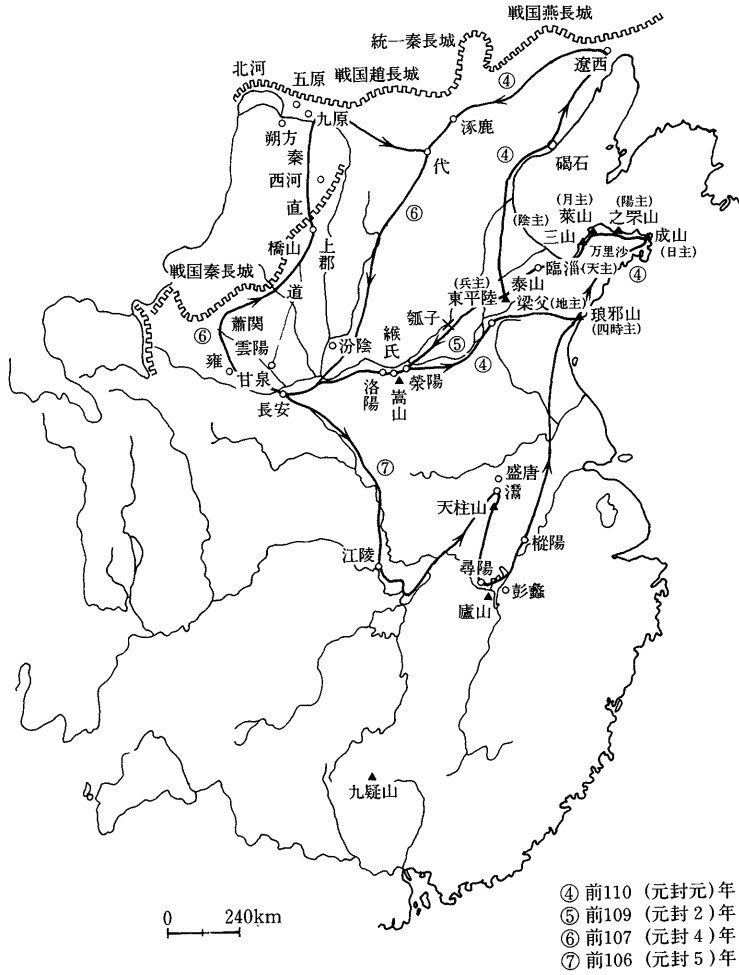
を報ず。

という。西南の旅行はこのときだけであったが、『史記』卷二九河渠書に「西のかた蜀の岷山および離碓を瞻る」と言っているから、岷山を仰ぎ見ながら、岷江の洪水時の増水を調節するためのに岩を切り放した離碓のわきを灌漑水が流れる様を見した。⁽⁹⁾ この水利事業は戦国秦の李冰の事業であり、前漢時代にも引き継がれて成都平原が豊かにかつている様を見て、故郷西の洛水に引かれていた秦鄭国渠とともに、秦帝国の形成に果たした水利の重要性を再認識したことであろう。蜀の離碓（のちに灌渠の水利施設を都江堰と呼ぶ）について、「此の渠は皆舟に行く可く、余有れば則ち用て溉漑し、百姓其の利を饗く」と伝える。

その後雲南の地に入った司馬遷は、中原とは異なる世界を体験して卷一一六に西南夷列伝を記述している。この地の地形的特徴は、高地のなかに小規模な盆地が点在し、その水源は周囲の山間から流れる河川や盆地内の湖水にたよっている。あたかも荒れた砂漠にオアシスが点在する西域の世界のごときであり、砂漠に相当する山地の合間に周囲と隔絶した小世界を無数に形成している。いわゆるパーズと呼ばれる地形である。執筆の目的は、巴蜀の西南外に位置する蛮夷の地がいかにして漢朝に服属したのかを示すことにあり、秦の事績はその前史として語られている。すなわち記述の一つは秦が諸侯を統一したときに、帰国の道を遮断された楚の末裔が現地を演を建国したこと、そしてもう一つはつぎの記述である。

秦時、常頰五尺道を略通し、諸此の国に頗る吏を置く。十余歳にして秦滅ぶ。漢興るに及び、皆此の国を棄て、蜀の故徼を開く。

[地図2：司馬遷の旅行(2) (第4回—7回)と武帝の巡狩]



すなわち秦帝国が五尺道を築いて西南地域に進出しようとしたが、帝国が十数年で滅んでしまったので中断し、漢はこの地をいったん放棄して巴蜀のものと国境まで退いたことが語られている。これらは南越を滅ぼして九郡を置き、夜郎と滇の王を封じ、それ以外の君長を滅ぼすという、武帝の対外戦略の成功の前史であった。司馬遷がこの五尺道の記事を何に基づいて記録したのかわからないが、「諸此の国に頗る吏を置く」の簡単な記述の部分をもって秦帝国が西南の地を郡県支配したとするわけにはいかないし、漢代人の「西南夷」観をもって秦帝国の外交を見るわけにはいかない。司馬遷が盛んに用いる西夷（昆明など）、南夷（夜郎など）、西南夷という華夷の国際秩序に基づいた地域的概念は、秦帝国の時代にはたして確定していたのかは疑問である。蛮夷を包摂するような儒教的天子観が出現するのは、司馬遷の時代の前漢武帝期まで待たなければならなかった。

前一〇（元封元）年には冬に北巡、三月から四月にかけて東巡が行なわれ、司馬遷は東巡に随行し、これが第四回目の旅行として数えられる。この歳の巡狩のきっかけは前年の南越と西南夷の征服であった。秦末の混乱時に辺境で独立政権を立てた南越も漢朝に滅ぼされ、南方の平定によって、軍事的には北方に集中することができたのである。そこで軍隊を率いて巡狩し、匈奴を威嚇した。

乃ち遂に北のかた朔方を巡り、兵十余万を勅い、還りて黄帝の冢を橋山に祭り、兵を須如にて沢（釈）く（武帝本紀・封禅書）。

『漢書』卷六武帝紀には、このときの北巡の経路がより具体的に、

雲陽自り行き、北のかた上郡、西河、五原を歴し、長城に出づ。北のかた单于台に登り、朔方に至り、北河

に臨む。兵十八万騎を勒い、旌旗徑千余里、威匈奴を震わす。……還りて黄帝を橋山に祠り、乃ち甘泉に帰る。

と記されている。雲陽、上郡、西河、五原から長城に出る道は秦の直道の経路と重なる。十八万騎も通れる大型道路はこのとき改めて修築したのではなく、おそらく秦の直道を継続して使用していたものと思われる。春三月緋氏に行き、中嶽の太室を祭つた後、いよいよ泰山に登り、山頂にまず石を立てさせた。これより前に始皇帝のあと不明になっていた封禪の儀式の方法について諸儒に議論させている。司馬談はこの間洛陽にとどめられて封禪の儀に加われず憤死したというから、このとき巡狩の一行が緋氏にむかう途中、洛陽に残されたのであろう。司馬遷は西南からの帰途すぐに父に面会した。

九十余歳にもなる斉の人丁公の始皇帝封禪の故事は、司馬遷がのちに山東に入ってから現地で耳にしたことを記録したのであろう。

曰く、「封（封禪書は封禪）とは不死の名に合するなり。秦皇帝上りて封ずるを得ず。陛下は必ず上らんと欲すれば、稍く上り、即ち風雨無くんば遂に上り封ぜん」と（武帝本紀・封禪書）。

秦始皇帝の封禪の儀の内容を記録したものは残されておらず、『書経』などの文献や現地の証言に頼らざるをえなかった。斉の地方の人々の心情からすれば、征服者始皇帝の封禪を認めることに抵抗があった。司馬遷の秦始皇本紀の記事も封禪の具体的内容には言及できず、故事をあげたあとには、実際に見た泰山刻石の始皇帝顯彰文をそのまま引用するだけであった。

二十八年……乃ち遂に泰山に上り、石を立て封じて祠祀す。下るに風雨暴に至れば樹下に休み、因りて其の樹を封じて五大夫と為す。

さきの丁公なる人間の言では、始皇帝は風雨に邪魔されて封禪を実現できなかったといわんばかりである。司馬遷の文章の方では封禪を行なったあと下山するときに、風雨が起こり樹下に避難したという故事になっている。五大夫の樹の故事は、司馬遷が武帝に随行して泰山に赴いたときに現地ですら耳にしたのであろう。後漢応劭の『漢官儀』に「小天門に秦時の五大夫の松有り、見に在る」と見え、後漢時代には五大夫の松として泰山の小天門にあったというから、司馬遷のときにもすでに山腹の登山道の松にちなんだ伝説が生まれていたのであろう。結局始皇帝の封禪の具体的内容は秦王朝の国家機密であつただけに、前漢には伝わらなかつた。司馬遷は、

其の礼は頗る大祝の雍に上帝を祀るに用いる所を采り、而して封蔵は皆これを秘せば、世得て記せざるなり（封禪書）。

と述べるだけであつた。秦の雍での従来の祭祀の方法を泰山封禪にも応用したとだけ述べるにとどまつた。封禪の儀を前にして、武帝は海辺を巡り、八神を祭つた。八神とは始皇帝が祭つた斉の信仰であり、天主、地主、兵主、陰主、陽主、月主、日主、四時主を指す。武帝は明らかに始皇帝の東方巡狩に倣つた。¹⁰⁾

是に於て始皇遂に東のかた海上に遊び、礼を行ひ名山、大川及び八神を祠り、僊人羨門の属を求む（封禪書）。

武帝も山東の海辺でやはり始皇帝と同様に、方士たちの神仙に傾倒し始める。

上遂に東のかた海上を巡り、礼を行い八神を祠る。齊人の上疏して神怪奇方を言う者は方を以て数うるも、然れども駭^{むく}る者無し。乃ち益々船を発し、海中の神山を言う者数千人をして蓬萊の神人を求めしむ（武帝本紀・封禪書）。

同行した司馬遷もこうした燕、齊の方士たちから多くの話を聞かされたことであらう。

太史公曰く、余巡りて天地の諸神、名山川を祭り、封禪するに從う（武帝本紀・封禪書）。

始皇帝と東方の方士に関する伝説も、秦朝側の史書にとどめるべき内容ではなかったので、司馬遷が現地で前漢時代の方士から直接耳にしたものを、秦史の記述のなかに挿入した。秦始皇本紀に記述されている齊人の徐市が童男童女数千人を連れて仙人を求めて渡海したが失敗したという故事がそうであり、また侯生や燕人盧生らの方士が始皇帝の陰口を言つて逃亡したことが始皇帝の怒りをかい、諸生穴埋め事件（阮儒）を誘引したという故事がそうである。秦始皇本紀には、侯生ら二人の会話があたかも秦の時代に同時記録されたように掲げられている。

侯生、盧生相い與に謀りて曰く「始皇の人と爲り、天性剛戾にして自ら用い、諸侯より起ち、天下を并せ、意を得て從にせんと欲し、古自り己に及ぶ莫きと以爲う。……」と。是に於て乃ち亡げ去る。始皇亡ぐるを聞きて乃ち大いに怒りて曰く「……盧生等吾尊んでこれに賜うこと甚だ厚くするも、今乃ち我を誹謗し以て吾不徳たるを重ぬ。諸生の咸陽に在る者を、吾人をして廉ねて問わせしむれば、或は詭言を爲し以て黔首を乱せり」と。

侯生、盧生のことばのなかにまだ始皇帝の生前に用いられていないはずの「始皇」という呼び方があるから実伝ではないといわれているが、これは後世司馬遷が漢代の方士から侯生、盧生の話として聞いたのであろうから、間接話法の表現として理解してもよい。いずれにしても、始皇帝当時の生の会話の収録ではないことは確かである。

夏四月いよいよ泰山で天を、梁父で地を祭った。司馬遷は武帝が泰山の山頂に立てた石については、すでに三月に登ったときのこととして、

東のかた泰山に上り、山の草木の葉未だ生ぜざれば、乃ち人をして石を上らせ、これを泰山の顛に立てしむ
(武帝本紀・封禪書)。

と述べるだけで、その刻石の文字については何もふれていない。後漢の応劭は泰山太守(中平六年・一八九年—?)としてこの刻石の文章を見たのであろう。『風俗通義』には高さ一丈二尺の刻石の内容について、

天に事うに礼を以てし、身を立てるに義を以てし、父に事うるに孝を以てし、民を成すに仁を以てす。四守の内、郡県と為さざる莫く、四夷八蛮、咸来たりて貢職す。天與極まる無くんば、人民蕃息し、天禄永く得ん。

と記録している。封禪といいながら皇帝の顕彰に終始し、祭天についてはまったく言及することのなかった始皇帝の刻石文とは明らかに異なり、ここには天を祭り、郡県の内と四夷八蛮の外とを嚴格に区別する前漢武帝の儒教的皇帝観が見える。同じ封禪を主宰しながらも、刻石というそれぞれ同時代の史料のなかでは始皇帝と武帝の

相違が明らかとなっている。儒教的粉飾のない始皇帝像を求めるうえで、ふまえておかなければならない点であろう。

武帝は封禪を無事終えると、北の碣石に行き、遼西から北辺をまわって九原から甘泉にもどった。

上乃ち遂に去り、海上に並い、北のかた碣石に至り、巡るに遼西自り、北辺を歴て九原に至り、五月返りて甘泉に至る（武帝本紀・封禪書）。

近年この碣石の地に当たる遼寧省南端綏中県から河北省秦皇島市北戴河にかけての海岸で、秦代の離宮遺跡が十カ所発見された。⁽¹²⁾ そのなかの綏中県石碑地と北戴河金山嘴遺跡では、漢代の「千秋万歳」銘雲紋瓦当、大型空心磚、陶井圈、陶文などが出土しており、これらの離宮の一部が前漢まで引き続いて使用されたことがわかった。武帝が碣石を訪れたときに、けっして秦の離宮を破壊することはせずに、かえって活用していたことが想像できる。武帝と始皇帝の接点を示す貴重な考古資料の発見といえる。秦始皇本紀始皇三二年の記事には、始皇帝が碣石を訪れたときに燕人盧生に羨門、高誓などの仙人を求めさせ、碣石の門に刻石させたことが記述されている。盧生は海から戻ると、「秦を滅ぼす者は胡なり」と記した録囚書という予言書をもたらしただという。このような秦の滅亡を予言させる故事は、やはり秦の記録には記載されるはずもないので、司馬遷がこの地で耳にした漢代の反秦伝説であろう。始皇帝はついに遼西の地に到達できなかつたが、二世皇帝胡亥がその念願を果たした。二世皇帝が遼西を訪れた事実も、司馬遷が現地で何らかの伝聞を得たのであろう。

帰路は北辺から上郡を通り、甘泉宮に戻った。同行した司馬遷は、北辺で秦の將軍蒙恬が築いた長城と亭障

(見張り台)や、前二二二年に山を開き谷を埋めて整備した直道を観察した。百年前の秦の遺跡を目の当たりにして、民を酷使した秦朝の権力をつぎのように実感している(『史記』卷八八蒙恬列伝)。

太史公曰く、吾、北辺に適き、直道自ら帰るに、行きて蒙恬秦の為に築く所の長城の亭障を觀る。山を暫り谷を堙め、直道を通すは固より百姓の力を輕んずればなり。夫れ秦の初めて諸侯を滅ぼし、天下の心未だ定まらざるに、傷痍つく者も未だ瘳えず。而るに恬は名將爲るも、此の時を以て彊く諫め、百姓の急を振るわせ、存孤を養老し、衆庶の和を務め修めずして、意に阿り功を興す。此其の兄弟誅せらるるに遇うも亦宜ならざるか。何ぞ乃ち地脈に罪あらんか。

司馬遷の見た秦の長城は、武帝によつてすでに前一二七(元朔二年)に修築されていた。卷一一〇匈奴列伝には、

是に於て漢遂に河南の地を取り、朔方に築く。復た故と秦の時蒙恬の爲る所の塞を繕い、河に因りて固と爲す。

と見える。

第五回の旅行は翌前一〇九(元封二年)であり、このとき武帝は神人と逢うために緱氏城から東萊山に行ったが実現せず、万里沙(東萊曲城)で祈つて泰山を祭り、帰路二十数年前(前二二三年)に黄河が決壊した瓠子で河神を祀り、堤防工事を行なつて戻つた(武帝本紀・封禪書)。卷二九河渠書論贊に、

余従いて薪を負い宣房を塞ぎ、瓠子の詩を悲しみて河渠書を作る。

とあり、司馬遷自身も巡狩に随行していた將軍以下の者とともに薪を積み重ねて堤防工事に立ち会った。この瓠子という決壊場所は東郡に位置し、すでに前一三二（元光三）年五月、二十年以上前に、大洪水で黄河の水は南に流れて淮水に達し、下流十六の郡に大洪水を起こしており、以後このときまで被害の影響が残り黄河南岸の梁、楚の地は不作が続いていた。司馬遷がかつての二十才のときの旅行では、最後の帰路、この梁、楚の地を通っているの、一度はこの地の深刻な状況を知っていたのであろう。このときは立場を変えて武帝に同行して立ち寄り、とくに武帝自身が黄河治水の不安を唱った詩を聞いて悲しみ、国家的治水灌漑事業の重要性を河渠書に記した⁽¹³⁾。河渠書の記述は、夏の禹王がとりわけ水害の深刻な黄河を、二渠と九河の分水によって洪水の力を殺ぐ方法で成功したことから始まり、春秋戦国の諸国もこの方法を受け継いでうまくいったことをつぎに述べる。分水の渠の建設は洪水防止だけでなく、同時に運河や灌漑に役立てられた。秦の鄭国渠の記述も、その文脈で語られ評価された。

是に於て関中沃野と為り、凶年無ければ、秦以て富彊となり、卒に諸侯を并せ、因りて命じて鄭国渠と曰う（河渠書）。

前漢初期に秦の地の利を統一の条件として挙げるものは多かったが、鄭国渠という水利の重要性をこれほどまで評価したのは、司馬遷が初めてであった。鄭国渠は司馬遷の故郷龍門にも近く、旅行するまでもなく実見したのであろう。河渠書には自ら訪れた水利の地を示すなかに、「北は龍門自り朔方に至る」といっているが、これは関中とその北辺を指しているのであり、鄭国渠も含まれる。前漢末の息夫躬のつぎのことばは、明らかにこ

うした司馬遷の認識を意識して漢長安城の水利事業を提案したものである。

秦は鄭国渠を開き、以て富国彊兵たり。今京師の為に、土地を肥饒せしむるに、地勢水泉を度り、溉灌の利を広く可し（『漢書』卷四五息夫躬列伝）。

河渠書の主題は、黄河下流の洪水を堤防によって力で制御しようとした漢代の方法を暗に批判することにあつた。⁽¹⁴⁾とくに自身の眼で見た瓠子決壊のすさまじさは強烈な印象を残したのであろう。黄河下流の堤防はすでに戦国諸国の趙、斉によって競って築かれていたが、当時は国境の長城と同じく軍事的効果を重視していた。河川を国境にした地は堤防が同時に長城の役割を果たした。したがって秦が東方諸国の堤防を決壊させたことは、司馬遷にとっては、非難するという認識はなく、むしろ交通の障害を除いた効果を評価しているかのニュアンスである。秦始皇本紀始皇三二（前二一五）年に、「城郭を壊し、隄防を決通す」とある文章がそうである。

第六回目は前一〇八（元封三）年にいよいよ太史令となり、また朝鮮四郡を置き、東北辺が安定したあと、翌前一〇七（元封四）年に、雍城で五時を祭って回中道を通り、北の蕭関に出て独鹿山、鳴沢（涿郡遵県北界）から西河（あるいは代）をへて帰った巡狩に従ったものである（武帝本紀・封禅書、『漢書』孝武本紀、郊祀志）。司馬遷は五帝本紀に「余涿鹿を過ぐ」といっている。司馬遷の北辺の旅行は二度目であったが、ここでは北辺の戦国長城についての認識があつたものと推測される。すなわち匈奴列伝に、

是に於て秦に隴西、北地、上郡有り、長城を築き以て胡を拒む。而して趙の武靈王亦胡服に変俗し騎射を習い、北のかた林胡、楼煩を破り、長城を築く。代自り陰山に並い、下りて高闕に至り塞と爲し、雲中、雁

門、代郡を置く。……燕も亦長城を築き、造陽自り襄平に至り、上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東郡を置き以て胡を拒む。

とあり、戦国秦、趙、燕の北辺三長城の東西両端の位置などを明確に記述している。

最後の第七回目の旅行は翌前一〇六（元封五年、武帝の南巡に随行したものである。南郡から江陵を通って東に向い、潜景の天柱山に登って礼を行って南岳といい、長江を尋陽、樅陽まで下り、彭蠡を過ぎて山川を祀り、北上して琅邪に向かった。河渠書に「余南のかた廬山に登り、禹の疏する九江を觀る」とあるので、司馬遷にとつては二十才の時以来の南方の旅であった。このときの行程は始皇帝の第五回巡狩（南巡）と重なり、きわめてよく似ている。武帝はすでに西巡（前一二二年）、東巡（前一〇七年）、北巡（前一〇七年）と終了していたので、残る南巡をこのとき達成した。始皇帝の場合も西巡（前二二〇年）、東巡（前二一九、二二八年）、北巡（前二一五年）のあとに南巡（前二一〇年）を行っており、武帝は始皇帝の巡狩の行動を十分意識していたのであろう。

一 応始皇帝を模範として四方の巡狩を行ない、封禪も始皇帝以来実現した武帝は、翌々年の前一〇四（太初元年）、いよいよ秦の制度からの脱皮をはかった政治改革を實行した。すなわち十一月甲子朔旦冬至の日は、前漢朝にとつても司馬遷にとつても重要な画期であった。秦に替わる王朝をすでに建てながらも依然として秦の制度を繼承していた前漢王朝が、王朝交替後二二年にはじめて自己の独自の制度の制定を宣言したのである。秦の十月歳首の暦を正月歳首の暦に改め、秦の王朝の色の黒にたいして黄色、数も秦の六から五を尊んだ。秦の制度の時代の終焉といえる。

司馬遷は随行しなかったが、武帝のこれ以降の晩年（五三歳以降）の巡狩はもっぱら神仙を求めた東方巡狩に限られており、始皇帝の行動を再現したかのようである。山東半島の海辺を巡ったときには、東海の蓬萊の神を求めては海辺から海を望んでいる。武帝の神仙への傾倒も始皇帝に劣らない。方士の李少君、少翁、欒大、公孫卿ら齊の方士が重用された。武帝のとくに神仙に傾倒した行為は、儒学重視の背後に隠されて批判的に見られがちであるが、その意味はもつと見直されてよい。⁽¹⁵⁾ すくなくとも司馬遷の始皇帝観に与えた影響は見逃せない。⁽¹⁶⁾

おわりに

われわれが秦帝国形成史を語ってきたときに第一級の史料として信頼してきた『史記』秦始皇本紀の価値は、今でも揺るぎない。しかし司馬遷がどのようにして秦始皇本紀をまとめたのかを探っていくと、秦始皇本紀の文章がより深みのある内容をもってわれわれに迫ってくる。これまで考察してきたように、司馬遷は二十歳のときに中国の長江中流から江南へ下り、北上して山東の地を旅行し、続いて皇帝の側近の郎中として西南の巴蜀、雲南を巡り、さらに武帝に従って巡狩に随行するなど、大旅行家であった。これらの旅行の途上、中国史上最初の皇帝の事跡に出会い、秦始皇本紀をまとめた。その歴史の体系化に当たっては、賈誼をはじめとする漢初期の官僚たちの秦王朝興亡史の議論を参考にしたが、武帝という時代が、中国史上最初の統一帝国の側面を戦国秦と切り離してとりわけ強調する独自の見方を生み出し、秦帝国に歴史的な評価を下したのであった。秦の歴史は、始皇帝前史の秦本紀と秦始皇本紀とに分断された。

司馬遷がたどった旅程の空間をたどることは、始皇帝の巡狩の経路をたどる旅であり、そこには意外なほど新しい発見があった。筆者は一九九一年九月、始皇帝が統一の翌年から実施した地方巡狩の経路である東方の地を調査した⁽¹⁷⁾。それまで征服者秦の立場で秦帝国を考えていたが、ここでは西方の黄土高原から出てきた帝王が、海辺の紺碧の世界に驚愕した息づかいが伝わってきた。山東省南の琅邪台から北の海岸を眺めると、始皇二八（前二一九）年に「南のかた琅邪に登り、大いにこれを樂しみ、留まること三月」（秦始皇本紀）と記されたことばが、現地を武帝とともに訪れた司馬遷自身の実感からくることばであったように思われる。司馬遷が巡り歩いた東方は秦に征服された地であり、この地の史書はすでに失われていた。したがってかれは秦の側の史料と征服地の伝説とを組み合わせて秦帝国の歴史をまとめたのである。司馬遷の時代にはやくも東方では伝説化した始皇帝の事跡を、いま一度検証していかなければならない。

その後一九九三年三月には、四川、雲南の地に入り、夏の禹王、古蜀の開明帝、秦の李冰の三人を治水の神に祭り上げた巴蜀の人々の歴史にふれ、さらに昆明では司馬遷が雲南で得た西南夷観がいかに中華帝国史観を支えることになったのかを実感した。こうした歴史の舞台をたどる調査によって、司馬遷の文章を読み釈くための一定の方向が見えてきた。二千年前の偉大な歴史家は、古代帝国の完成された前漢武帝時代のフィルターを通して始皇帝という帝王を見ていたのであり、秦始皇本紀のなかに收拾、整理された様々な史料をいま一度司馬遷の行動の過程をたどりながら一つ一つときほぐしてみると、そこには秦の統一とはそれほど完成されたものではなく、背後に秦に征服された地域の歴史が浮かび上がってくる。

司馬遷の文章の一つの重要な読み方は、司馬遷の立場を相対化させることによって、司馬遷の文章の背後にある世界を読み取っていくものであろう。司馬遷の残した文章から、司馬遷の伝えようとしなかった世界を読み取れることも、古代史の方法として許されてよいであろう。

註

(1) 藤田勝久「『史記』秦本紀の史料の性格」(『愛媛大学教養部紀要』第二四号、一九九一年)は、秦本紀の

戦国時代の記述は戦国故事を利用せず、戦国紀年を主体に構成し、記事資料をはさんでいるとする。また宮崎市定氏は、『史記』李斯列伝の文章は、上奏などの公文書、縦横家の議論、民間故事からなり、起承転結のリズムがあるという(『史記李斯伝を読む』一九九七年のち『宮崎市定全集』巻五、岩波書店、一九九一年)。

(2) 西嶋定生「嫪毐の乱について」(一九七二年のち『中国古代国家と東アジア世界』、東京大学出版会、一九八三年所収)。

(3) 伊藤徳男「司馬遷の李斯・蒙恬批判について」(『鈴木俊教授還暦記念東洋史論叢』一九六四年)、町田三郎「秦漢思想史の研究」第二章「統一の思想」四「李斯について」(創文社、一九八五年)。町田氏は李斯伝

後半は秦末の動乱を趙高、二世皇帝について創作した虚構の作品という。

(4) 王鳴盛『十七史商榷』巻一「子長游蹤」。王国維「太史公行年考」(『觀堂集林』巻第十一)は、後漢衛宏の『漢旧儀』に見える司馬遷が十三歳のときに天下を巡って諸侯の史記を求めた説を誤りとし、また太史公自序に掲げる地名は旅行経路とすると無理な順路であるとした。

(5) 司馬遷の二十歳のときの旅行については目的は明らかでない。エドゥアール・シャバンヌ、岩村忍訳「司馬遷と史記」(新潮選書、一九七四年)三五―三六頁、李長之「司馬遷之人格與風格」(上海開明書店、一九四八年、和田武司訳「司馬遷」徳間文庫、一九八八年)、鄭鶴声「司馬遷年譜」(漢声出版社、一九七三年)など参照。佐藤武敏「司馬遷の旅行」(大阪市立大学文学部紀要「人文研究」第二九巻第四分冊史学、一九七七年)は、江淮では国家祭祀に関係する地を訪

れ、齊魯では礼を学習したのは、太史公であった父の職務と関連があるので、父を助ける旅行であったと考えている。加地伸行『史記 司馬遷の世界』（講談社現代新書、一九七八年）は、将来の『史記』執筆のための旅行という実用の目的を持ったものではなく、激情的な性格からくる自由な旅行であったという。目的とは別に、結果として、『史記』のなかに地方の故老たちから伝聞した生きた史料を取り込んだことは事実である。小倉芳彦『古代中国に生きる』（三省堂、一九八〇年）IV「父と子——二人の太史令」は、父の指示による放浪の感傷旅行と見る。

(6) 拙稿「秦始皇帝伝説の成立と史実——泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荆軻秦王暗殺未遂伝説——」（『茨城大学教養部紀要』第二六号、一九九四年）。

(7) 前掲註(5)鄭鶴声、佐藤武敏論稿参照。武帝の巡狩全体については顧頡剛「漢武帝年表」「漢武巡守及其祠祀等事」（『顧頡剛読書筆記』）。

(8) 司馬遷が現代史の武帝の時代をどのように批判的にとらえていたかに関しては、中村嘉弘「史記平準書の考察——司馬遷の武帝時代に対する批判について——」（『漢文学会々報』第二二号、一九六二年）。山田伸吾「漢太史令の世界——「史記」成立の背景につい

て——」（『名古屋大学東洋史研究報告』一、一九七二年）は、始皇帝と武帝が不老不死の現実的欲望から天に関わったのに対して、司馬遷は天官をつかさどる太史令として天の客観的秩序をもっぱら観察したとする。伊藤徳男氏は、武帝時代に普通であった皇帝への直筆を引用しただけの司馬遷には武帝批判の精神はないという（『史記十表に見る司馬遷の歴史観』、平河出版社、一九九四年）。

(9) 拙稿「古代巴蜀の治水伝説の舞台とその背景——蜀開明から秦李冰へ」（『中国水利史の研究』、国書刊行会、一九九五年）。

(10) 顧頡剛「秦皇、漢武之巡狩與封禪」（『顧頡剛読書筆記』）。稲葉一郎氏は、武帝は始皇帝を意識して巡狩していたという（『秦始皇の巡狩と刻石』、『書論』第二五号、一九八九年）。

(11) 栗原朋信『秦漢史の研究』（吉川弘文館、一九六〇年）。

(12) 遼寧省文物考古研究所「遼寧綏中県姜女墳、秦漢建築遺址発掘簡報」（『文物』一九八六年第八期）、河北省文物研究所・秦皇島文物管理处・北戴河文物保管処「金山嘴秦代建築遺址発掘報告」（『文物春秋』一九九二年増刊）、李宇峰「秦始皇東巡與秦代行宮建築群

址的發現」(一九九五年)。

(13) 佐藤榮氏は、瓠子決壊が先進地帯淮北平野にもたらした大被害の様子と、武帝の治水軽視の態度を明らかにしている(「瓠子の「河決」——前漢・武帝期の黄河の決壊——」『史滴』十四、一九九三年)。

(14) 佐藤武敏氏は、河渠書が武帝の治水、水利工事を全面的に評価、賞賛したものでなく、大規模水利工事を批判したものと見る。(『史記』河渠書を読む)前掲『中国水利史の研究』)。

(15) 吉川幸次郎『漢の武帝』(岩波新書、一九四九年)。

(16) 魏晋南北朝時代になると、秦皇(秦始皇帝)と漢武(前漢武帝)の神仙行為が並んで批判的に取り上げられる(吉川忠夫『古代中国人の不死幻想』、東方書店、一九九五年、第二章「神仙に蠱惑された皇帝たち——秦の始皇帝と漢の武帝」)。

(17) 拙稿「秦帝国の形成と東方世界——始皇帝の東方巡狩経路の調査をふまえて——」(『茨城大学教養部紀要』第二五号、一九九三年)。

(18) 前掲註(17)拙稿。